2023年12月14日取材

和歌山県

産地レポート

ハクサイ

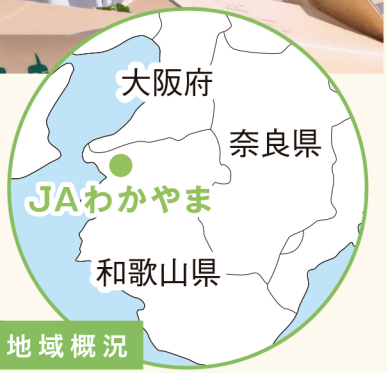
JAわかやま　圃場にハクサイが残らない！

根こぶ病強耐病性とそろいのよさで威力を発揮

「黄づつみ78」と「黄づつみ95」を導入

（編集部）

↑角田部会長をはさんでJAの中里氏（左）と児玉氏（右）。



地域概況

「果樹王国」ともいわれる和歌山県。JAわかやまは、和歌山市にあり、関西国際空港をはじめ交通面では、鉄道や阪和自動車道など道路網が整備され、京阪神市場への距離が短縮されるなど、都市近郊農業として恵まれた条件が整っています。気候は瀬戸内気候区に属し、比較的雨が少なく温暖で、年平均気温16.1℃、年間降水量は1352.6㎜で気象条件にも恵まれています。

農業は、和歌山市西部の砂地地帯の野菜をはじめ、紀の川流域の水田地帯の水稲および裏作野菜、東部の傾斜地帯の果樹、市内全域での花きなど、都市近郊農業特有の多彩な農業が展開されています。

ハクサイ栽培

JAわかやま管内のハクサイ栽培は「キャベツ・白菜（軟弱）連絡協議会」で組織され、中央ブロック、北ブロック、東ブロックの3つに分かれ、ブロックごとに集荷場が備わっています。取材をさせていただいたハクサイ部会は208名、面積は56haの規模です。2022年度の出荷総数は4400t、販売金額は2億9000万円、2023年度は11月の時点で前年比140％を達成し順調な推移です。出荷先は京阪神市場が中心で、競合する産地は愛知県豊橋や岡山県の牛窓などの暖地となります。

当地のハクサイ栽培は大半が水田裏作で半世紀近くの歴史があります。課題は連作を重ねてきたため、根こぶ病への強い抵抗性が必須です。従来も耐病性品種の「きらぼし90」などを中心に栽培されてきました。根こぶ病にさらなる強耐病性をもつ「黄づつみ78（THA583）」と「黄づつみ95（THA590）」を試作しその優位性が認められ、指定品種として作付けを増やしています。

↑副課長の中里さんは産地の根こぶ病対策の品種変遷も知り尽くすベテラン指導員。産地のリクエストに応えるタキイハクサイ品種への信頼は厚い。

根こぶ病強耐病性が発揮される「黄づつみ78」

「黄づつみ」のお話を聞かせていただいたのは中央ブロックの部会長角田勲（つのだくん）治（じ）さんです。ハクサイの部会長を長年務められる角田さんは、部会でも中心的な生産者です。この日はJAわかやま営農指導課中里成吾（なかざとせいご）さんと水田裏作

↑年内どりの中早生種「黄づつみ78」は、2022年から部会で指定品種に。当地では８月25日～９月７日まきで９月13日～９月25日定植。株間38cmで畝幅120cmの２条植え。

←「黄づつみ78」について、「そろいがいいのと生理障害にも強い」と評価する角田部会長。

↑４玉で12kgが基準。横には張るが縦の生育は止まってくれるという「黄づつみ78」。取り遅れても安心。

←尻張りのよい「黄づつみ78」。

↑「黄づつみ78」を栽培する角田部会長。「黄ごころ」シリーズの導入以降、根こぶ病対策の「きらぼし」シリーズなど当地とタキイ品種とつながりは深い。

営農担当の児玉常義（こだまつねよし）さんも同行いただき、角田部会長と合流、「黄づつみ78」の収穫途中だった圃場に立ち寄りました。角田部会長は、この品種をどう評価されているのでしょうか。

最初に評価いただけた特性は耐病性。これまで当地で耐病性を発揮してきた「きらぼし」や他社の品種と比べても「根こぶ病に安定して強い」と喜ばれています。中里さんも「当地では根こぶ病に強いことは品種選択で必須」と強調されます。

水田裏作でハクサイを古くから連作する当地で根こぶ病対策は大きな栽培上の課題です。「キャベツと輪作したり努力はしていますがそれだけでは足りません」と角田部会長。「品種の耐病性はありがたいですから」という一方で、水田裏作営農担当の児玉さんは「耐病性が強くなっても耕種的な定期防除や薬剤防除もお願いしています」と総合的防除で産地を守りたいという気持ちが伝わってきました。

形状が安定し箱詰めで有利

さらに角田部会長は、「暖冬もあって『きらぼし』は近年過剰肥大から生育にばらつきが出てきたけど、『黄づつみ78』はばらつきが出ない」と生育の違いも評価しています。最近は温暖化の影響で盆明けから９月の栽培が高温で厳しくなっています。しかし、栽培開始を後ろにずらしても、ハクサイの丈、長さを確保するためには、当地の遅植え限界を９月25日に定めています。「黄づつみ78」は高温期の生育下であっても縦への生長は、ある程度で止まってくれるそうです。「過剰肥大しないので箱詰めしやすい」と喜ばれます。それというのも当地の出荷は12kg段ボールに４玉を交互に詰めますが、１玉が３・７kgを超えると基本３玉詰めとなり輸送コストがかかります。

「この品種は長さが32cmくらいになるとそこで止まってくれる」というのが生産者の実感。どうしても取り遅れになりがちな収穫作業ですが、多少遅れても何とかなる「黄づつみ」の在圃（ほ）性のよさは他の作業が重なる生産者にとっては「ありがたい」特性なのです。

在圃性がよくて廃棄なし

根こぶ病以外でも、石灰欠乏症のような生理障害の発生や腐敗も見ないとのこと。「この品種は根が強い。収穫で根元に鎌を入れる時、しっかりしている。女性なら少し力がいるくらい」角田部会長は収穫したハクサイの白く健全な尻部を見せてくれました。

重量野菜の代表と言われるハクサイですが、暖冬傾向による生育のばらつき、根こぶ病の増加、生産者の高齢化、需要の減少など、栽培面、価格面、労働面でリスクを抱えています。

「この品種になってから、収穫に入った圃場に一つも廃棄が残らない。生産者にとってこんな気持ちがいいことはない」と角田部会長は嬉しそうに収穫済みの圃場を見つめました。

産地の継続・発展を見据えるＪＡで若手の児玉さんは、「温暖化の影響で栽培初期の高温は常態化し、根こぶ病の重度化が懸念されました。天候不順や暖冬による生育のばらつきなど、産地の存亡にかかわるといっても大げさではありません。この品種の安定性は産地を救ってくれていると思います」と、当地のリクエストに応えてくれた「黄づつみ」シリーズに感謝の声をいただきました。

現在中早生種「黄づつみ78」が年内どりの指定品種で作付けが14・2ha、晩生種の「黄づつみ95」が4・6ha導入されています。中里さんによると需要が伸びて高値が期待できる年末～２月前半を埋める品種として在圃性のある品種を求めているとして、試作中の中晩生種「黄づつみ90」にも期待しているということでした。近畿圏では温暖で穏やかな気候の和歌山県。京阪神の消費地を近くに抱える生産基地としての役割は大きく、これからも産地の維持と安定は欠かせません。